

Kappa Novels



お願

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけます。ありがたく存じます。

なお、このほかに、「カッパの本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きをえくたされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(郵便番号112)

光文社 出版局

長編推理小説 盲^{からす}目の鴉

昭和55年9月5日 初版1刷発行

定価650円

昭和55年9月30日 4刷発行

著者 土屋 隆 夫

長野県北佐久郡立科町芦田

発行者 小林 武彦

印刷者 堀内 俊一

東京都千代田区三崎町2-18-11

堀内印刷

発行所 東京都文京区音羽2
振替 東京 6-115347

株式会社 光文社
電話 東京 (942) 2241 (代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(関川製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Takao Tutiya 1980

(分)0-2-93(製)02408(出)2271 (0)

Printed in Japan

長編推理小説・書下ろし

もう もく からす
盲目の鴉

つち や たか お
土屋隆夫



カッパ・ノベルス

序章	野狐忌	5
第一章	無頼派の軌跡	9
第二章	信濃路の女	26
第三章	ホメロスの殺人	40
第四章	藪の中	63
第五章	めくら鴉はどこにいる	83
第六章	陶器の鴉	96
第七章	死を語る詩	124
第八章	女人焚死	140
第九章	童女の系譜	168
第十章	白い鴉はいたか	190
第十一章	肌の悲劇	218
第十二章	声の壁	232
第十三章	未完の終止符	254
第十四章	つながれたトリック	265
	あとがき	290

本文のイラストレーション

吉原澄悦

序章 野狐忌

野狐忌と書いて、「やこぎ」と読む。はて、こんな忌日があったのかと、いふかしく思うひともあろう。もとより、狩猟には縁のない私だから、野生の狐を手に掛けたこともなく、その冥福を祈るいわれもない。

昔から、文士歌人の命日が、そのまま俳句の季語になっている例は多いが、「野狐忌」も、いわばそれに当たる。しかし、芥川龍之介の「河童忌」や太宰治の「桜桃忌」などと違って、こちらのほうは知るひともあるまい。それも道理で、「野狐忌」と名付けたのは私自身であり、いわば私の心に刻まれた歳時記の一つにすぎない。その日は、十一月三日である。しかし、大半の歳時記に冬の季語として記されている「文化の日」とは、なん

の関係もない。

私にとって「野狐忌」は文字どおりの忌日である。それは、世に容れられなかった一人の作家が、無頼な人生を自らの手で断った日であり、人にうとまれ、卑しめられた彼の作品から、罪人の祈りにも似た苦悩と慟哭の声を耳をかたむける、追慕と回想の一日なのだ。

その作家とは、田中英光のことである。

彼が、三鷹市下連雀にある禅林寺の境内に入って、文学上の師と仰いだ太宰治の墓前で自殺したのは、昭和二十四年の十一月三日であった。「野狐忌」の由来は、彼の作品の題名になっている「野狐」から採ったものである。

しかし、その一日を、私がひそかに「野狐忌」と名付けて、心の歳時記にとどめているのは、必ずしも彼の作品に対する哀惜だけではない。それは、私の人生にとっても、重要な意味を持っているのだ。

昭和二十四年十一月三日。当時六歳だった私は、田中英光の自殺現場に居合わせた。彼の背後に立って、おそらくは四、五メートルも離れていない地点から、その一部始終を目撃したのである。

この模様を、当時の新聞は、およそ次のように伝えている。

『田中英光は、この日、新潮社に野平健一氏を訪ねたが、同氏の不在を知り、三鷹へ赴いて亀井勝一郎氏、更に戸石泰一氏を訪ねたが、いずれも不在であった。夕刻五時半ごろ、禅林寺にある太宰治の墓前で、持参した酒とアドルムを飲んだ後、左手首の動脈を安全カミソリで切つて自殺を図つた。近くにいた子供が発見して寺に急報し、直ちに井頭病院に運ばれたが、同夜九時四十分、出血多量のため息を引きとつた。臨終の場に肉親の姿は見えず、孤独な死であつた。持参した文学全集の扉に、覚悟の死です、死体その他恥ずかしめないように、と遺書らしい文章が記されていた……』

各紙の記事は、いずれも似かよつた内容だが、発見者を「近くにいた子供」としている点も同じである。しかし、その「子供」は、一名ではなかった。数人がいたはずである。そして、その中の一人が、この私であつた。

もう二十数年前の出来事である。記憶は、すでに遠い。そこにいた子供たち——禅林寺の境内を遊び場にしていた仲間の名前さえ、思い出すことはできない。しかし、

その茫漠とした過去の中から、浮かび上がってくる顔が一つだけあるのだ。

それは「さなえちゃん」と呼ばれていた女の子である。さなえちゃんは、母親と二人だけで住んでいた。農家の物置か納屋を改造したような家で、道路に面した窓には、いつでも花模様のカーテンが引かれていたような気がする。たしか一度だけ、私はその家の中に入ったことがある。ペンキの匂いのする部屋の中央に、大きなベッドが置いてあり、そこにさなえちゃんが、ひっそりと腰を下ろしていたのだ。

その日の光景を、私は今でも覚えている。

スカートから伸びた、白く、つめたそうな素足。肩のあたりまで垂れた長い髪。

ガムを噛んでいた、小さな口の動き。

私を手招きして、ベッドに並んで掛けさせ、不意に、私の肩を抱くようにして仰向けに倒れ、「ママとおじさんたち、いつもこうして寝ているのよ」と頬を寄せてきたさなえちゃんの、秘密めいた声と、かぐわしい息の匂い。サラサラとした髪の毛の感触。

さなえちゃんが、いつ、着ているものを脱ぎ去ったの

か、そのへんの記憶は定かではない。しかし、私の目にはいまでも、古い印画紙のように、さなえちゃんの裸身が焼きついている。その肌は、白い陶器のようになめらかで、まばゆいほどの美しさが、幼いわたしの胸を息苦しくさせた。わたしは珍しいものに触れるように、小さな乳首に指をのぼしたが、「だめ。くすぐりたい」と体をよじって、わたしの手を払いのけたさなえちゃんの胸のあたりに、長い髪がゆれていた――。

そのとき、私の体を走り抜けた、甘美な戦慄の意味を、当時の私に理解できようはずはなかった。後に、私が中学に入り、高校へ進んでからも、その日のさなえちゃんを思い描きながら、幾度も自慰にふけたものである。そのとき、空想の中の少女は、まぎれもなく私の恋人であった。

回想が、わき道へそれたが、田中英光の自殺を目撃した私のそばに、さなえちゃんがいたことは間違いない。彼女と母親は、私が小学校へ入るころは、すでに姿を消していた。いつ、どこへ行ったのか分からない。後日、二、三の人に消息をたずねてみたが、だれも知らないようであった。

「たしか、そんな女の子がいたっけなあ。おふくろは、進駐軍相手のパン助じゃなかったのか。生きていりゃ、親子で稼いでいるんだろう」

そうかもしれない。私はあきらめるよりほかはなかった。

だから、今となつては、私が目撃した事実を、立証してくれる人はいない。

しかし、この文章が、さなえちゃんの目にとまったら、彼女だけはあの日のことを思い出してくれるに違いない。肩幅の広い、ガッシリした大男のことを。

墓石を抱くようにして、何か話しかけていた男の泣き声を。

その男の手から、吹きこぼれた血が、墓石をぬらし、血だまりを作り、白っぽい土の中へ吸いこまれていった光景を。

さなえちゃんが、不意に泣き出して、私の腕にしがみついていたことを。

その声に、ふり向いた男の頬のあたりを、あざやかに染めていた血の色を。

立ちすくんでいる私たちを、追い払うように手をふつ

た男が、次の瞬間に見せた、あの泣き笑いにも似た悲しげな表情を……。

断片的な光景だが、さなえちゃんは、きつと覚えてい
るだろう。私たちは、寄り添うようにして、この様子を
見つめていたのだ。

この幼い日の体験が、私の人生に、いまでも長い影を
落としている。後年、私が大学で心理学を専攻し、自殺
作家の研究などを続けているのは、そのためかもしれない。

ともあれ、田中英光が師と仰いだ太宰の作品は、いま
も多くの読者を持っている。生前の太宰がそうであった
ように、時には昂然と眉を上げて、時には道化役者の笑
いをふりまきながら、彼は現代の若者たちの間を歩きま
わっているのだ。しかし、田中英光の名を口にする人は、
あまりに少ない。

私は、今にして思い出す。血に彩られた半顔をこちら
に向けて、私とさなえちゃんに見せてくれた、あの優し
げな表情を。少年のように、澄んで光っていた瞳の色を。
それは、自らを溝に落ちた一匹の野狐になぞらえ、無軌
道、無頼、デカダンと呼ばれた男が、荒廃した生活の中

で、ひそかに点しつづけていた心の灯のように、いつま
でも私の記憶の中に、またたき、ゆらいでいる。
私だけの野狐忌は、明日、十一月三日である。

一合の酒冷えしまま野狐忌の夜

(K大学新聞学芸欄「一人一話」より)

第一章 無頼派の軌跡

1

真木英介が、四季書房という大手の出版社から、田中英光全集の解説を依頼されたのは、八月下旬のことであった。

真木は、ことしの四月までK大学の助教授だったが、世間では文芸評論家のように見られてきた。余技のつもりで始めた仕事で、いつのまにか本業を上まわる恰好になった。専攻は心理学だが、その学問的な業績よりも、「異端派詩人の系譜」とか「自殺作家論」などといった著書のほうが、よく知られている。さきごろ出版した「狂

気の美学」が、「あなたはいつ自殺するか」という、いささかショッキングな傍題も手伝って、このところベストセラーの上位に顔を出していた。

いずれも、異常心理学や精神病理学の立場から、作家を観察し、作品を解剖したもので、そのユニークな発想が、若い読者の心をつかんだのである。

先方からは、吉野奈穂子という担当の編集者が出向いてきた。血色のいい頬に、指で押したようなエクボがあつて、俊敏なよく動く眸が、明るい性格を思わせる、若い女性であつた。

彼女は、田中英光全集の出版について、一通りの説明を終えると、大柄な体を、折り曲げるようにして言った。「いかがでございましょうか。編集部では、単なる作品の解説ではなく、むしろ作家論といったような内容のものを希望しております。つまり、田中英光という特異な作家の内面を、心理学者としてのお立場から、自由に論じて頂きたいと考えているのでございますが——」

「要するに、田中英光の診断書を作成するわけだね」「はい。そうお考え下さって結構でございます。従来の解説とは違って、おもしろいものが頂けるんじゃないか

と、みんなが期待しております」

「ふーむ、診断書か……」

真木は、煙草に火をつけて言った。

「それで、全集は何巻ぐらいになるの？」

「十巻を予定しております。各巻に、二十五枚から三十枚程度のお原稿を頂くことになるかと存じます」

「なるほど。完結までには、三百枚ちかく書かされるわけだ。そりゃたいへんだよ、きみ。だいいち、評論の稿料は安いからねえ。まず、わりに合わない仕事だな」

「申しわけございません」

ペコリと頭を下げて、奈穂子は笑いながら言った。

「でも、その点は、わたしどもも心得ておりますわ。こんどお書き願うものは、独立した作家論として、うちから刊行させて頂く予定でございます。いずれ、全集が完結してからのことでございますが……」

「ほう、きみのところで出してくれるの？」

「はい。この全集とはべつに、現代作家論シリーズといったものを企画しておりますので、その中へ加えさせて頂くことになるかと存じます」

このことは、真木英介の心が動いた。それならば、

自分の仕事としても残るわけだ。だいいち、四季書房のような一流出版社から、自分の本を出せるということは、願ってもない幸運ではないか。

真木は、内心の喜びをおさえるように、新しい煙草に火をつけた。

「それにしても、田中英光の全集とは、大胆な企画をたてたものだねえ」

「うちの編集長が、大の英光ファンなんです。企画会議でも、あぶないんじゃないかという声があったんです。

すると、編集長が立ち上がって、大演説を始めました。

不遇な作家に光を与える。これが四季書房の使命なんだ。太宰ばかりがなせモテる。お前たち、英光の作品を読んだことがあるのか、とテーブルを叩いて、売れなきゃ、おれがみんな買う——この一喝で、出版が決定いたしました」

「そいつはいい。名編集長だよ」

「気が短いいんです」

と奈穂子は笑った。唇の間から、白い、きれいな歯並びがこぼれた。

「しかし、ぼくは編集長の意見に賛成だな。英光の文学

は、いままで、不当に低く評価されてきたんだ」

「やはり、当たっていましたわ」

「なにが？」

「わたしの予想がです。先生なら、多分、そうおっしゃるだろうと考えておりましたの。わたし、K大学の大学新聞にお書きになった『野狐忌』という随想——あれを拝見しておりましたから……」

「ほう。どこで手に入ったのかね」

「わたしの兄が、K大学に行っておりましたから……先生、あの中にお書きになったことは、全部、本当のことなんですか」

「勿論だよ。ぼくはこの目で、英光の自殺を目撃したんだ。あの当時、ぼくの家は三鷹にあって、両親と一緒に住んでいた。禅林寺のすぐ近くでね。テレビなんでものはなかったし、遊びといえば、寺の境内を駆けまわって、鬼ごっこや、かくれんぼをするぐらいだった。毎日のように、仲間を誘って出かけたものだ。英光の自殺を目撃したのも、決して偶然じゃない……」

「では、あのさなえちゃんという女の子も、そのとき

「ぼくのそばにいた。すべて、あそこに書いたとおりだよ」

「先生は、その子をお好きだったんでしょ」

「好きだったねえ。六歳の少年にだって、異性を慕う心はある」

「つまり、初恋のひとつ——」

「そうかもしれないなあ。いまでも、さなえという名前を耳にすると、ドキッとする」

「まあ」

「色の白い、髪の長い女の子だった。戦後の混乱期で、みんなが自分の生活だけを考えていた時代だよ。人の移動も烈しかった。あの母子が、どこから来て、どこへ行ったのか、だれに訊ねても分からないんだ」

「わたし、あの『野狐忌』を拝見したときに、ああ、これは先生のラブレターなんだな、と思いましたわ」

「宛先のないラブレターか。実は、先年、交通事故で亡くなったぼくの家内が、やはり、さなえという名前だったんだ。顔つきは、まるっきり違っていたがね。ところ

が——」
と言いかけて、真木は、てれくさそうに頭をかいた。

「どうも、つまらんことを喋りすぎたようだ。話をもとへ戻そう。それで締切りはいつごろになるの？」

「十二月いっぱいには、最初のお原稿を頂きたいと存じます」

「ふーむ。あと四カ月ばかりか。収録作品の解説だけなら簡単だが、田中英光の診断書となれば、データをそろえる必要があるな」

「つまり、資料でございますね」

「そう。彼はデカダン文士の典型のように言われている。その点、坂口安吾や太宰治と共通する一面もある。しかし、本質的には違うと思うんだ。例えば『オリンポスの果実』のような、若さと生命力に溢れた作品を書いた彼が、わずか七、八年後には、無頼派の作家に変貌している。信じられないような変身だ。正宗白鳥のことばを借りると、前をまくって、小便をたれながら往来を歩いているような書きぶりだ、ということになる……」

「ひどすぎますわ」

と若い女性編集者は、唇をとがらせた。「わたしにはよく分かりませんが、そういった作品の中に、あの作家の人間的な苦悩が現われているんじゃないでしょう

か」

「まあ、見方はいろいろあるからね。ただ、ぼくが興味を感じるのは、彼の遺書だよ。それは、彼が持っていた太宰治全集の扉に書き残されていたものだがね。その中に『ぼくは神の手に、或いは悪魔の手に打ち倒された』というようなことばがある。彼を破滅的な人生へ駆りたてたもの、つまり、田中英光を打ち倒した悪魔の手は、なんであったのか。これを解明しなければ、彼の診断書は書けないというわけだ。そのためには、できるだけ資料がほしいし、調査の時間も必要になってくる……」

「でも」

と吉野奈穂子は、汗ばんだ額にまつわる髪を、かき上げるようにして言った。「先生の『自殺作家論』を拝見しますと、田中英光についても、かなりお調べになっているように思いますが……」

「いや、調べてはいないさ。あの程度のことなら、だれでも知っているはずだ。もともと、田中英光論を書くつもりじゃなかったからね。自殺した作家をズラリと並べて、その作品の中に、自殺の予兆を感じさせるものがあるか、という点を追求してみたわけだ。ねらいが始めか



yoshi'4.

ら違ふんだよ。しかし、こんどは、まともな作家論だからね。できるだけ多くの資料を——それも、未発表のものを手に入れたい、ということになる……」

「分かりました」

と奈穂子は大きく頷いて立ち上がった。「資料の蒐集（しゅうしゅう）につきましては、わたしどもも、お手伝いをさせて頂きます。取材のために、ご旅行なさいますような場合は、勿論、わたしが手配をいたします。そういうことで、ぜひお引き受け頂きたいと存じます」

「そうだねえ」

真木英介は、いつとき考えこむ目つきになったが、すでに彼の心は決まっていた。

「あまり自信はないが、やってみることにするか」

「ありがとうございます」

奈穂子はホッとしたように頭を下げた。

「解説のほうは、わたしの担当になっておりますので、ご用事がございましたら、いつでもお伺いいたします。では、なにぶんよろしく……」

礼を述べて帰って行く女性編集者を、真木は玄関まで送り出した。それから、書斎に入ると、大型のデスクの

前に腰を下ろして、フーと息を吐き出した。三百枚くらい解説となれば、全体の構想を決めなければならぬ。よし、思いきって型やぶりのものを書いてみせるぞ、といった気負いが、真木の心をすこしずつ昂（たか）ぶらせてゆくようであった。

2

年譜によると、田中英光は大正二年一月、東京赤坂に生まれているが、両親は高知県人であった。

父の岩崎英重（ひでしげ）は、土佐郡土佐山村の出身で、秋月鏡川（きようせん）と号した。維新史の研究者として、数冊の著書もあるが、べつに「富士新聞」を発行するなど、当時としては、かなりの知識人であり、文才にも恵まれていたらしい。

さらに祖父の英生（ひでなり）は、土佐山神社の神主で、漢学者としても近在に知られていた。父祖二代にわたる文人の血を、英光もまた継承した。

彼の作家的素質は、こうした家系の中に見出すことができるのである。

しかし、英光が受けつくだものは、単に「文人の血」

だけではなかった。彼は「私の父系の血には狂気の血統が流れているのかもしれない」と書いてあるが、こうした怖れを抱かせるほど、父も祖父も激情的な性格の持主であった。

特に父親は、酒乱の傾向があったという。この「狂気の血統」に対する畏怖感は、英光の心の深部に、いつも重たく沈澱していたはずである。彼は作品「魔王」の中で、

「いつか死ぬのなら早く死のう。それも若いうち」と書き、

「魂も影も良心も、悪魔がいるなら買ってくれ」

と記しているが、この絶望的な心境も、おのれの未来に対する暗い予感から生まれたものではあるまいか。彼の自殺は、酒とアドルムによる錯乱状態の中で行なわれたもの、というのが一般の見方であった。

当時の新聞は、自殺の原因として、離婚話のもつれ、思想上の悩み、などと報じているが、これは皮相の見解ではないか。見解というよりも憶測にすぎない。彼の自殺の背景には、「狂気の血統」に対する怯えがあった。彼は、自らを狂人に仕立てることによって、発狂の恐怖

からのがれようとしたのではないか。

彼は、意識的に、狂気の世界へとびこんだ。遺伝による発狂が訪れる前に、人為的な「発狂」を自分の意思で実現した。それが、彼をおびやかしたつづけた「黒い血統」に対する、ただ一つの復讐であり、逃避であった――。

真木英介は、田中英光の年譜を見ながら、ぼんやりと、そんなことを考えてみた。

これは、彼の作品や生き方を理解するための、一つの手掛かりにはなろう。新しい見方だと言えるような気もする。しかし、依頼された解説の中へ、独自の見解として打ち出すほどの自信はない。発想が、いささか空想的であり、独断にすぎるからであった。

真木英介は、再び年譜の細かい活字に目を寄せていった。

田中英光には、二姉と一兄があった。彼は末っ子である。岩崎家に生まれた英光が、田中姓を名のっているのは、母方の実家を継ぐことになっていたからであった。

母親を済（と）という。後に新子と改名した。土佐郡高知村